

1982.12.11

1982年12月15日

匿名座談会-対ソ関係改善に動く中国-

匿名座談会

対ソ関係改善に動く中国

——中国はなぜ またどこまで対ソ修復に動くか——

一部に、北京の対ソ「接近」は「戦略計画の大転換」「中ソ再結合への動き」とする見方や論評があるが、果たしてそうか？

以下は本会専門家グループによる「自由討論」の要約——

- A……外交評論家
- B……中国問題研究家
- C……ジャーナリスト
- D……財界人
- E……軍事評論家

「四化」のために平穏な国際環境を

A 最近の中ソ関係について、これを主に中国側の事情から眺め、若干検討してみたい。まずBさんから……。

B 外交は内政の反映である、というごく一般的な・常識的な「法則」が中国には最もよく当てはまる。これまでの中国の歩みを見ると、内政が外交にきわめて敏感に反映していることがわかる。

したがって、その外交政策に転換の兆しが見えたときには、まずそのときの内政指導、あるいは内部情勢がどのようになっていくかをマークする必要がある。

では、現在の中国の内政指導、国内政治状況はどうなっているか。周知のように、中国では今日、すべてが近代化建設の一点に集中し、そこに系列化している。中国の政策指導の目立った特徴は、よかれ悪しかれ新しく定めた目標にすべてを集中し、すべてをそこに系列化していくという、いわゆる一点集中主義であって、これがあの国の伝統だが、現在では「四つの近代化」が、すべてをそこに集中し系列化していく目標になっているわけだ。

しかれば、その「四つの近代化」を推進していく上に何が、またどのような条件が必要かという点、これは中国側自身が演説や談話の中でしばしばのべているところだが、要するに静かな国際環境である。この点について中国がのべているところは、まさに彼らの本音であり、その通り受けとってよからう。これが、対ソ関係修復に動き出した第一の動機だ。

したがって、その限度はといえば、すでに内外で多く言われているように、要するに緊張を緩和

したい、そのために国家関係を正常化したいということであって、かつての「蜜月時代」の復活とか、たとえば友好同盟条約の再締結を目論んでいるということではない。デタント、関係の正常化であって、これがかつての蜜月時代の再来に結びつけるのは行き過ぎた見方だと思ふ。

「原点回帰」も一つの動機に？

もう一つ、そうは言っても、一九六〇年代からの二〇余年にわたる対ソ緊張関係、強硬姿勢を解くというのは、やはり大転換だといえるわけだが、中国がそれをやろうとしている背景には——これはたぶん私の勝手な憶測、勘ぐりかも知れないが——次のようなこともあるのではないか。

つまり、中国が発表する諸資料、文献によると、「四つの近代化」の前に立ちほだかる国内的阻害要因として、今日、左および右からの抵抗・排撃が依然として根強いという。中でも現在は左からの妨害がひどい、と言っているのだが、事の本質をとり上げれば、「四つの近代化」促進のために対外開放政策をとった結果、流入する資本主義的な考え方・風潮が「行き過ぎた」自由化や「社会主義的モラルとは相容れない」個人主義の風潮に火をつけ、さまざまな腐敗や頹廃をも生んで、それが若者世代の精神を崩壊させようとしている、そのことのほうがむしろ深刻な問題である。つまり、ここ五年間にわたる開放政策、対西側接近路線の結果あらわれてきたのは、「右」からの脅威であって、実はこのほうが左からの抵抗・妨害よりも深刻である。そしてそのことが、対西側傾斜からの後退、対ソ関係改善への一つのモメントになっているのではないか。その意味では、社会主義の原点に返るといった、共産主義者

としての一つの動機をそこに見ることができの
ではないか——。

中国なりの等距離・全方位外交

しかし、中国の首脳が言明するところはこうである。たとえば、さきごろ訪中したキッシンジャー（元米國務長官）に対して趙紫陽首相がのべているのだが、要するに、さき（九月）の一二全大会での重要決定を要約すれば、国内経済の活性化措置をとる、対外開放政策を継続する、の二つである。つまり、さきにも述べたように、中国の現政権は近代化建設にその政権の命運をかけているということだ。

しかも、中国の現在の国家財政は日本円に換算して約一四兆円、日本のほぼ三〇%程度の規模である。この程度の財政規模であの大きな国の近代化資金を賄っていくというのは、難しいというよりほとんど不可能である。したがって、米国および日本との関係は何としてもこれを維持したい。そこで、中ソ関係が正常化すること自体が、直ちに米国や日本との関係に影響してくるとはいえない、と私は思う。

くり返すと、中国は「四つの近代化」を達成するためにすべてをそこに集中しようとしている、という視点から問題を眺めるべきであって、「四化」達成のために日本や米国、その他自由主義諸国との関係は絶対に維持する、これがとことん冷え込むことは何としても回避したい、また「四化」達成のために平和な国際環境を求めるといふ立場から、対ソ関係の改善をも希望する、というのが彼らの考え方であろう。したがって、要約していえば、すでにジャーナリズム一般も言っている通り、中国は今日、彼らなりの等距離外交なしは全方位外交を展開しようとしているということだと思ふ。

独立自主外交でフリーハンドを

A さきの日中民間人会議で、中国の人がこんなことを言っていた。われわれは二つの膨張主義国、つまり米ソ双方に対して反対しているが、膨張主義、覇権主義といっても米ソは同じではなく、われわれは米国に対しては明らかにより好意的である、と。

日本でも一部の人は、社会主義ということを重

く見て、しかも鄧小平は中ソ理論闘争の際の中国側のチャンピオンであり、その立場で、スースロフにつき従っていたアンドロポフとはよく知り合っている、という点から、アンドロポフ体制のソ連とはうまくやっていたいける、イデオロギー的にも今日の中ソ間には何の障害もないとして、社会主義を強化するという立場から中ソは再び同盟関係に返るだろう、という議論をしているが、これは私は行き過ぎた見方だと思ふ。

B 行き過ぎだ。そんなことにはならない。

A だから、私はいまのBさんの見解は非常に正鵠を得ていると思う。たしかに、中ソ両国は八〇〇〇キロに及ぶ国境をもって接しており、その点から、お互いにできれば相互の関係が平穏なものであることを望むのは当然だ。とくに今日、中国はご指摘のような事情から、またソ連は周知のような数々の内外困難から、相互間の緊張緩和を必要としているわけだ。

そこで、ある意味では中国は米国に対して「ソ連カード」を使うという見方もあり得ようし、ソ連は明らかに米国に対して「中国カード」を使うようとしているようにも見えるわけだが：

B 一つ言い忘れたが、最近の北京の外交論文が非常に強調している点は、独立自主外交の展開ということである。つまり、われわれは独立自主外交の立場から、ソ連の覇権主義にはもちろん反対するし、イスラエルを援助する米国の覇権主義にも反対する——。要するに、中国はフリーハンドを得たいということだ。だからその立場からすると、ソ連カードを使うとか、そういうことはいと思ふ。

国内批判派への対応の意味も

A 日本で学者などが「カード」ということを盛んに言う、仮にそれを当方も乱用しての比喩なんだがね。いまのイスラエルの問題は、おそらく中国は第三世界重視の立場から言っているのだから。これもよく理解できることだ。

それと、自主外交の主張には、国内の各勢力への呼びかけの意味があるのではないか。鄧小平の外交にはいろいろな批判がある、それを「われわれは自主外交をやっているのだ」ということで抑えていこうと……。

B それはあるかも知れない。しかし、もうそ

の辺になると勘ぐりになるから、あまり言っているわけではないことだが……。ついでにもう一つ、勘ぐれば、結局、政権を維持するためにそうしたほうがメリットがあるという、そのバランスシートから対ソ接近をはかっているとも考えられる。

A ソ連の場合は明らかに対米戦略上の観点に主眼がおかれている。一〇月二七日のブレジネフ演説でその点が明らかにのべられている。彼はクレムリンに軍の指導者を集めて、われわれは中国の対ソ政策が急激に変わるとは思わないが、中国に最近ある種の兆候が出てきているのだから、われわれは米国との敵対関係の強まりに対処する上に、いささかの兆候といえどもこれを利用しなければならぬ、と言っている。

B 鄧小平の政権がいま国内的に批判されている点は、あなたたちが日本や米国に過度に傾斜する政策をとったために、国内が非常に腐敗したのではないかと。つまり、貪官汚吏、若者世代の思想の乱れ、墮落——要するに資本主義に窓を開放したからこうなったと、これで苛められている。だから、それに対する反応としての対ソ接近ということは、考えられぬはない。

中国版ニューディール政策

C 最近、中国を旅行して各地を見てきたが、人民公社は実質上、もう明らかに解体されていって、一年くらい前から、たとえば農地でも山林でもみんな各人に分配してしまったという。そして、今後五〇年間くらいはいまの行き方を変えないというのだ。ある地方に行くと、その地の外事弁公室主任という人物に会ったとき、このあたりの山に木が少ないのはなぜか、日本は造林面積がふえている世界でも珍しい国なのだが、と尋ねたのがきっかけで、そういうことを聞いたのだが、公有の山林だと農民は勝手に木を伐ってしまいが、各人のものにするとう木を伐らなくなった、だからこれからまた山に木が生えてくる、いずれまた見にきてくれ、と……。

B 中国版ニューディールだ。だから、こういってニューディール——資本主義的要素の導入は、ソ連の新政権も考えねばならない段階にきている。この辺はどうも中国のほうが知恵がある。

A ただ、アンドロポフもそういうことは知っているらしい。だから、彼の演説を読むと、農業

の活性化ということが大いに強調されている。ブレジネフの農業政策は間違っている、と彼は考えているようだし、五一歳の若手ポルトビュロー、ゴルバチョフなどもそういう考えらしい。農民が土地などを自分のものだと感じなければ農業はダメで、農業の活性化をいうならその辺を考えなければならぬ。ソ連の新政権がそれをどこまでしっかりやれるかわからないが、やるとしてもそれは、アンドロポフが自己の権力について自信をもってきたときだと思う。いまはずいぶん妥協しているからね。こういう妥協から、クレムリン内にはいろんな論争のあることがわかるのだが。

対ソ結合・対西側断絶はあり得ず

D さっきのBさんの見解とはだいぶ違う話をこの間、ある学者から聞いた。東京外語大の中嶋（嶺雄）という先生だが、あの人は非常に強く、中国はこれからソ連と手を握ってほんとうの共産主義体制に入っていくのだ、だから日本の外交その他も、いまのような感覚でやっているのとあとで困ったことになる、と言っている。

B 鄧小平のリーダーシップが続く限り、この点だけはぜひ見方の基本においてほしいと思うのは、要するに、現在の中国の指導部はその政権の命運を「四つの近代化」に賭けているということだ。いま言われた農業の新しいやり方、人民公社の実質的解体とか個人農の復活、私有制の拡大、あるいは都市においても多くの個人経営を許すとか、こういった資本主義的要素の導入は、みなそのことにつながっている。日米その他西側との経済・技術交流も、そのために絶対欠かせない。それらに対する国内の思想的・政治的反対や反撃はたしかに強いが、もしそれによって「四化」が挫折することになると、それはそのまま政権の命運にかかわる。だから、中嶋君の説は——彼はちょっと意地になっているところがあるから。(笑い)

A それは日本人の悪いクセで、すぐ議論が「勝った、負けた」になり、またそれで状況や物事を判断する。日中国交正常化も平和友好条約も、みんなそれで判断するものだから、どうしても意地になってしまふ。意地になることは、情勢判断を間違え出す発端だ。

D 彼の話にこういうのがあった。私は初耳だったし、彼も「真偽のほどはわからないが」と断

わっていたが、華国鋒（前党主席）は毛沢東の私生児だと（笑い）。

A その説は前から聞いているが…

D それ故に毛沢東が（華国鋒に）「あなたがやれば安心だ」と言ったと——あれはまた、顔が毛沢東とよく似ているそうだな。

B その話は、現在台北に居るかつての中国共産党員の某氏がつくり上げた話だと私は思う。それはもしかしたら本当かも知れないよ。しかし、そんなことはこの際どうでもいいことだよ、中国の情勢を判断するのに（笑い）。

近代化の出発点—党の相対化

ついでにもう一つ、今日の中国を認識する上にてひ頭においてもらいたいことは、この間の一二全大会における最も注目すべきことの一つで、どの新聞も指摘していないのだが、中国共産党なるものを著しく相対化しているということだ。要するに、絶対的な党から相対的な党に引下げたということである。このことは、どうような問題を将来に残すか、共産主義国家であるが故にこの点は、中国を見る場合、頭の底においておく必要がある。

A 党を引下げ、代わって国家を前面に出したわけだ。これは新しい憲法でそのようにしたわけで、これすなわち近代化だ。国の近代化というときに一党独裁を残しているということでは、やはり無理があり、近代化にならない。ほんとうの近代化をやるためには、党を国家の後に下げることが必要で、その意味で中国の新憲法は正しいことを言っていると思う。

B だからさっきから言うように、まず何よりも「四つの近代化」だ、すべてがその達成のために向けられねばならない、素人が（専門分野に）介入するな、と…。

A 革命のときは党が主役だが、その段階が過ぎればそれではいけない。ソ連ではいまなおそれが残り、一党独裁で無理なことをやっている。

B ともかく、中国の現指導部が近代化にいかん執念をもっているかが、党の相対化にふみ切ったことでわかる。これはある意味で、社会主義の原則の大転換だから…。

新たなロング・マーチ

E 「四つの近代化」の中での軍の近代化の位置づけは？

B いまそれに手をつけているのではないか。その前提として、最近の大きな人事異動がある。

E 米国もこれはというものを売らない、日本にもそれは全く期待できないということがあるかと思うが、兵器装備があまりよくなっていけない気がする。そこで、いまの兵器体系がそもそもソ連モデルであるということもあり、ソ連に接近することで、こういった兵器・部品の供給をソ連に期待する、ということはないだろうか？

A それも中嶋君などが言っていることの一つの根拠になっているようだ。兵器だけでなく、機械その他生産設備もソ連モデルのものを多く残しており、そういうものの部品の供給をソ連に仰ぐために云々、と…。

B 現在の中国の基幹産業の原型は、七〇%程度がソ連製だ。「四つの近代化」と対ソ関係の関わりを見る場合、たしかにこの点も重要だろう。胡耀邦（党総書記）が少し前に、思想家などを集めて開いた会議で講話をしているが、その中で彼は、われわれはあと一世紀経ってようやく世界の最先端国に追いつけるだろう、と言っている。二一世紀の当初三〇年間にその基盤ができ、後半になってどうにか最先端国に伍していける、だからそれまでは歯を食いしばって頑張ろうではないか、と。軍の近代化も、要するにそういう中国人的な大きな時間の幅で見ているので、ここ二年とか三年でどうしようというものではない。

E つまり、新しいロング・マーチ（長征）だね。まず基本的なところから近代化していこうということ、軍の近代化についてもそういう姿勢が見える。

B 何しろ、服装を変えるだけで大変な金が必要だろうからね。

A そこで、いままでの話を前提にして考えると、中国に関する限り、ソ連の今後のやり方、打つべき手には、やはり一つの限度があるわけだ。だから次に、アンドロポフのソ連はどう出るかという点に話を移していけばいいと思うが、これはまた別の機会に譲るとしよう。